

(さつまのかみ) 係助 格助  
 薩摩守忠度は、いづくよりや帰られたりけん  
 (係助 四段・未完了「たり」用 四段・用(促音便))

(さむらひ) (わらはいちにん) 格助 副詞  
 侍五騎、童一人、わが身ともに七騎取つて返し、  
 (係助 四段・未完了「たり」用 四段・用(促音便))

(さんみしゆんぜいきゃつ) 格助 係助  
 五条三位俊成卿の宿所に**おはして見給へ**  
 (サ変・用 接助 (補動) 四段・已 格助 格助 格助 格助 格助)

**ば**、**門戸を開けて開かず**。「忠度。」と**名のり**  
 (接助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助)

(補動) 四段・已 (おちうと) 完了「たり」終  
**給へ** **ば**、「落人帰り来たり。」と**て**、**その内**  
 (作者↓忠度 接助 格助 格助 格助 格助 格助 格助)

(補動) 四段・已 完了「り」終  
**騒ぎ合へり**。薩摩守、馬より**下り**、みづから高らかに  
 (形動・ナリ・用 格助 上二・用 副詞)

四段・用 過去「けり」体 (べち) 四段・未 打消「ず」終  
**のたまひけるは**、「別の子細**候はず**。三位殿に  
 (作者↓忠度 係助 格助 格助 格助 格助 格助 格助)

**申す** **べきことあつて**、**忠度が** **帰り参つて**  
 (補動) 四段・俊成卿 ラ変・用(促音便) 格助 格助 格助 格助)

**候ふ**。**門を開かれずとも**、**この際まで**  
 (忠度↓俊成卿 格助 尊敬「る」未 接助 格助 格助 副詞)

**立ち寄りせ給へ**。「**と**」の**たまへば**、俊成卿、  
 (補動) 四段・命 格助 四段・已 接助 格助 格助 格助)

**「なることあるらん**。その**人ならば**苦しがる**まし**。  
 (ラ変・体。連体詞 格助 断定「なり」未 打消推量「まじ」終)

**入れ申せ**。「**と**」**て**、**門を開けて** **対面あり**。  
 (補動) 四段・命 格助 接助 格助 格助 格助)

この**の体**、何となう**あはれなり**。  
 (形動・ナリ活用・終)

薩摩守 **のたまひけるは**、「年ごろ**申し承つて**  
 (補動) 四段・命 格助 接助 格助 格助)

のち、おろかならぬ**御事に思ひ参らせ候へ**  
 (打消「ず」体 格助 (補動) 下二・用(補動) 四段・用 格助)

**ども**、**この二、三年は**、京都の**騒ぎ**、国々の  
 (形動・ナリ活用・未 格助 格助 格助 格助)

乱れ、**しかしながら** **当家の身の上的** **ことに**  
 (副詞 格助 格助 格助 格助)

(補動) 四段・体 (そらく) サ変・未 打消「ず」終  
**候ふ間**、**疎略を存せ** **ず** **と** **いへども**、**常に**  
 (忠度↓俊成卿 格助 (忠度↓俊成卿 格助 四段・未 打消「ず」終 格助 格助)

**参り寄ること** **も** **候はず**。君**すでに** **都を** **出で**  
 (忠度↓俊成卿 係助 (忠度↓俊成卿 係助 副詞 格助 格助 格助)

尊敬「さす」用(補動) 四段・用 完了「ぬ」終  
**させ** **給ひ** **ぬ**。  
 (忠度↓君(安德天皇) 係助 格助)

薩摩守忠度は、(都落ちした後)どこからお帰り  
 (お引き返し)になったのだろうか、  
 侍五騎、童一人、自分と合わせて七騎で引き返し、

五条の三位俊成卿の屋敷にいらっしゃって  
 ご覧になると、  
 門を閉じて開かない。「忠度。」と名乗り

なされると、「落人が帰ってきた。」と言って、門の中  
 では騒ぎ合っている。薩摩守は馬から下り、自分自  
 身で大きな声を上げて

おっしゃったことは、「特別なわけはございません。  
 三位殿に  
 申しあげたいことがあつて、忠度が帰って参つて  
 ございます。門をお開きにならなくても、この近く

までお寄りになってください。」「とおっしゃる  
 ので、俊成卿は、  
 「そのようなこと(わけ)があるのだろうか。その人  
 ならば差し支えないだろう。

入れ申しあげよ。」と言って、門を開けてご対面な  
 される。  
 その様子は、なんとなくしみじみと感慨深いもので  
 ある。

薩摩守がおっしゃったことには、「長年(和歌を)  
 教えていただいて  
 以来、(あなたのことを、和歌のことを(おろそ  
 かにしないこととお思い申しあげてございました  
 が、この二、三年は、京都の騒ぎや、(地方の)  
 国々の乱れ、

(これらは)ことごとく(当家(平家)の身の上的こ  
 とでございますので、(あなたを、和歌のことを(こ  
 ないがしろには思っておりませんが、いつも  
 お近くに参上すること(おうかがいすること(も  
 ございませんでした。天皇はすでに都をお出に  
 なされました。